

変わり者：『シェリーの生涯と作品』書評

A Translation of Virginia Woolf's "Not One of Us" from *The Death of the Moth* (1942)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

(和歌山大学教育学部英語教室)

2012年10月5日受理

ベック教授はシェリーの伝記をまた新たに書いたと
いって、頭を下げたりはしない。もうこれまでに徹底
して調べ上げられたことをまたやったことについて、
理由を説明するわけでもない。教授が手に入れた新し
い文献も殊更重要なわけではない。それでもみながよく
覚えている逸話を再度繰り返すことに意を尽くした。
絵付きで、分厚く、細に入り、念のはいったこの二冊、
そう、さらなる二冊があるのだ。それぞれの世代で何
度も口にする話というものはある。なにか新しい趣向
をそれに加えるとかというのではなく、そういった話
をシェリーの伝記というだけでなく、われわれ自身の
ことにしてくれる、なにかしらの風変わりな特徴があ
るという理由で。水平線の上に堂々といつまでも立っ
ている、船に乗って通り過ぎるときの海上標識、船が
動くとそれも動くが、それでも同じ位置にずっと留ま
っている。

シェリーの生涯を書き換える発見はこれまでたくさ
ん記録されてきた。シェリーがまだ生きている間でも
五人を除けば、シェリーのことをだれもが立派な詩人
だと思っていた。シェリーは言ったものだ：「その姿
形がまきちらしかねない罪悪、墮落のたぐいまれなる
具現者としてだな」(訳注：Essays, Letters from Abroad,
Translation and Fragments. Ed. Mrs. Shelley (1840)から
の引用。Monthly Chronicle, vol. 5 (1840)にこの本の書評が
載った)。六十年後エドワード・ダウデン(訳注：Edward
Dowden, シェリー研究の文芸評論家。1886年にシェリーの伝記
を、1900年に作品を編纂した)はシェリーの作品を英国伝統
のものとして出版した。つぎにマシュー・アーノルド
はシェリーを普通の人間の尺度にまで貶めた(訳注：
Mathew Arnoldがシェリーの作品を「研究の価値なし」とした
ことを言っている)。これまで幾人の伝記作者、批評家が
シェリーのことを無罪にしたり、有罪の判決を下して
きたか、勘定することは難しい。そうして今度はわれ
われの番だ。シェリーがいったいどんな種類の人間な
のかを決めるのは。それでベック教授の批評を読むこ
とになる。新しい事実を見出すためではなく、こちら
の移ろいやすい影に照らし合わせて、もっと鮮明にシ

ェリーの輪郭を映し出すために。

もしこれが目的とするならば、その目的充足の機会
を読者に与えるのはベック教授以外、適任はいないだ
ろう。きわめて公平無私、それでいてはっきりとした
特徴を提示してくれる。ベック教授にははっきりとし
た意見がある。だがそれを押しつけようとはしない。
シェリーに対する態度は温かいものでいて、こびへつ
らうものではない。シェリーに熱狂しているわけでは
ない、とってけなしているわけでもない。個人的な
好みとともに主張したいことはおそらくふたつだ。ひ
とつ、ハリエット(訳注：Harriet Westbrook。シェリーが19
歳の時に駆け落ちした相手。当時16歳。その後シェリーがMary
と恋に落ちたときは、すでに娘が一人生まれ、さらに身重だっ
た)はきわめて虐待されたということ。もうひとつ、シ
ェリーの詩がもつその政治的な意味合いは十分評価さ
れているわけではないということ。たぶんシェリーが
書いたたくさんの詩をひとつひとつ吟味する必要はな
いだろう。またその詩に山と谷が何度言及されている
かを知る必要もまもないだろう。でも学識と明晰な頭
脳を誇る、ベック教授の史実の編纂は見事なものだ。
教授ならこう言う、この本にはシェリーの生涯で実際
に知られていることがすべて書かれている。十月にシ
ェリーはこんなことをした。十一月には、あんなこと
をした。それでほら、いまこの詩を書いているじゃな
いか。あの友人に会ったのがここだよ。それから膨大
な資料を器用に指でこねまわして、感情やことばやそ
れからシェリー自身が書いたもの、メアリが書いたも
の、ふたりについてほかの者たちが書いたものに、日
付と事実をなんとか埋め込もうとするのだ。そうす
ると読んでいる者はシェリーの生涯という豊かな流れの
なかをぐいぐい水をかき分けて進んで行っている気
になる。ほら今度こそシェリーの実態を捕まえたぞとい
う気になる。薄赤い眼鏡越しでもなく、鉛色の眼鏡越
しでもなく。これまで研究者の鼻の上に鎮座していた、
多感とか上品ぶりとかの色眼鏡越しでなく、当時のま
まのシェリーをはっきりと見るのだ。もちろん、こ
こでわれわれは過ちを犯している。われわれも眼鏡は、

目には見えないけれど、かけているのだ。でもシェリーをはっきりと見たという幻想はその幻想が続いている限り、意見を固めようというわれわれの気持ちを引き立たせるに十分なのだ。

われわれのこのころの画廊にはわれわれ独自のシェリー一像がある。痩せていて、骨太の男、そばかす顔、かなり突き出た大きくて青い目。服はよれよれだ。でも品がある。「シェリーは紳士よろしく服を着こなしていた。」礼儀正しく、物静かな態度。でも甲高く、耳障りな声で喋った。そしてすぐにかんしゃくを起こした。同じ部屋にいと、なにかしら不調和をかもしているこの男が目について仕方がない。側にいるだけで奇妙に不穏だ。なにか極端なことをしそうだというばかりではない。側にいる者をなにかしら滑稽な存在にしまうのだ。早くから、まわりにいる普通の人間はシェリーが異常だということに気づいていた。そうしてわからないままに自己保身の本能に従い、シェリーに規律を守らせようとしたり、そうでなければ立派なひとたちの出入りする社会に足を踏み込ませないようにした。イートン校では「気違いシェリー」というあだ名だった。そうしてみんな泥団子を投げつけた。オックスフォードでは指導教官の部屋のカーペットに酸をこぼした。「新しく買ったばかりのものをすっかりダメにしてしまった。」そうしてあれやこれやの主張の違いで放校になってしまった。

その後、すべての虐げられた主義と人民の英雄となった。それから銀行投機、出版社とのあつれき、アイルランド放浪。反逆罪の判決を言い渡された三人の職工、誰に見向きもされない、羊たちの群れ、あらゆる種類の糸つむぎ女たち。彼女たちは虐げられるか、夢を持っているか、シェリーを見て自分たちの主導者と見なした。シェリーの青春時代の最初の一年はこうして煽動ピラを女たちの帽子に投げ入れるだけに暮れた。苦痛を除くために、きたない羊を撃ったり、募金を募ったり、ピラを書いたり、海にボートをこぎ出せば、瓶を投げ入れる。瓶はバースタブル町の町書記官が割ってみると、なかに煽動ピラがはいっていて、「町長がまだ正確には知らない趣意書」と書いてあった。こうした流浪と遍歴にシェリーは必ず女をひとりあるいはふたり伴っていた。胸に子供を抱いているか、身重それも出産間近だった。ひとはピラを、老婆の帽子の中に放り込むのを見て、おかしみをこらえきれず、大声で笑い出してしまったということだ。

シェリーの肖像画は誰でもよく知っている。変化するのはただひとつ、われわれの態度だ。シェリー、激しやすく、他におもねることなく、無神論者で、世界を変えるのだという信念のもと、海にピラを投げ入れる。半ば英雄的で、まったく楽しい像となって現れる。その一方で、シェリーが戦った相手そして世界は、ばかげた存在となる。ともかくもだらしなく、甲高い声

の男が、その凶暴さと奇癖でイートン校を、オックスフォードを、イングランド政府を、バースタブルの町書記官、町長を、サセックス地方の紳士連、メアリの口やかましい友人たちに倣って、ひとくくりにして、ブースとバクスターという数知れない名もなきひとたちを、うまい具合に、ばかばかしい存在におとしめた。

しかし不幸なことに、われわれは組織や機関をばかばかしい姿にすることはできても、男であれ女であれ、個人をそんなに単純な姿にってしまうことは難しいのである。人間関係は複雑すぎる。人間性というのは捉えがたい。こうしてハリエット・ウエストブルックは、シェリーに出会わなければ、きっとありふれた家庭の普通の母親になっていたことであろうが、出会ってしまったことで、支離滅裂であきれた女になってしまった。世界の改革を望みながら、馬車とボンネットもほしがるような女に。ついには冬の朝、サーペンタイン池に引き寄せられ、絶望のうちに溺死した。それからメアリとヒッチナー嬢、ゴドウィンとクレア、ホッグとエミリア・ビビアニ、ソフィア・ステイシーとジェイン・ウィリアムズ。こうしたひとたちには、多分、悲劇的なところは何もない。そう、確かに滑稽なところがあるのだ。それでもシェリーとのつながりは決して混じりけのない、意気揚々たる結論をもたらすことにはならない。シェリーは正しいことを行ったのだろうか。それとも周りの者たちのほうが正しいのだろうか。彼等の関係はことごとく修羅場で混沌としているのだ。向こうがよく見えない。頭をひねるばかり。

われわれは別の作家を思い起こすかもしれない。シェリーよりも強い説得力を持つ、あるいは普通の人間の幸福をより簡単に破壊してしまう力を持つ者。その生涯を思い浮かべるだろう。たとえばトルストイとその妻とか。自分が天才であると思う強い強い信念が普通の人間の、のんきな無信、つまりは妥協と結託すればきっと修羅場、それもずっと長引いて、ひどい種類の修羅場となるだろう。双方の側の一番悪い部分が表に現れてくる種類の修羅場だ。でもトルストイは自分の人生観をひとりであるいは修道院にでも入って作り上げたことだろうが、シェリーの場合、自分の気質の中にあるなにかしなやかで狂信的なものに突き動かされ、男にしろ、女にしろ相手とのつぎきならない関係に陥っていった。「人というものはいつだってなにかかにかを恋い焦がれているものだと思う」、シェリーはそう書いた。でもこの「なにかかにか」というのは、詩とか抽象論とか、一般社会の善とかにのめり込むこととは別に、じつは異性の身体に巣くうことを意味していたのだ。シェリーには「おそらく永遠であると思われるもの」をメアリの眼の中に見ている。そしてそれが消える。つぎにはエミリアの目に現れる。それからそれは紛うことなく、ソフィア・ステイシーやジェイン・ウィリアムズの眼の中に明々白々と現れたのだ。恋を

する男というものは、かなえられることのない望みがその居場所を変えると、いったい何をしようか。シェリーは言う、歩きつづけなければならない、何かにぶつかるまで。それでなにか障害となるといふのだ。もしわれわれがシェリーだとしたら、その歩みをとどめるものは、人間のさみしいところを縛り付けている慣習とか迷信ではない。ブース家のひとたちやバクスター家のひとたちではない。オックスフォードはシェリーを追放したかもしれない。イングランドも追放するかもしれない。それでも修羅場、嘲笑にもかかわらず、「おそらく永遠であると思われるもの」をシェリーは探し求めたのだ。つまり恋をし続けたのだ。

しかしシェリーの愛の対象は混合の構成物、半ば人間、半ば神であったので、その恋の方法は同様に曖昧な様相を帯びた。シェリーは人間とは異なる部分を持っている。シェリーが出した最初の手紙を評して、ゴドウィンはそれに気づいたことを書いている。シェリーの書き方には「細かいことを一般化して書く癖」があることをぼやいている。ゴドウィンに言わせれば、その書き方でシェリーが「単なる個人」ではないことを示す効果が文章に出てくるというのだ。シェリーが亡くなったとき、メアリ・シェリーは自分の人生を思い返し、「わたしはなんてへんてこな人生を送ってきたのだろう。恋、青春、不安、不敵な思い、はやくからどれもわたしを人生というおきまりの日常から引き離してしまったわ。そしてわたしはこの生き物、姿形は人みたいでも、この変わり者、この生き物と結びついてしまった。数知れない悲惨と不快、そのどれにもわたしは巻き込まれてしまった。そうしたものにつきまわっていたこの生き物と一緒にあったのよ。」シェリーはひどい「変わり者」だった。その妻にとってさえも、シェリーは「生き物」だった。幽霊のように出てきて、消えてしまう。そして永遠の命を捜している。その場限りのことなどシェリーにはほとんどわかりもしなかった。喜び、悲しみ、こうしたものからひとは糸を紡いで生活の暖かい保護膜を作り出すものだが、シェリーのところをつかむことはまるでなかった。奇妙な形式のためにシェリーの手紙は生き生きとしたところを失ってしまっている。ころ通わせるもの、おもしろみ、そういうものがシェリーの手紙にはまるでない。

同時に、シェリーがこのハリエットや、あのメア리를愛していなかったとしても、人間を愛していたというのは全くの真実で、ベック教授もその事実をうまく強調している。人類の惨めさを感じ取るシェリーの力は、自然を神が作りたもうた美として感じ取る感受性と同様にあざやかに消えることなく燃えていた。シェリーは雲を愛した、山々を、そして川を。ほかのそれよりも強く情熱をもって愛した。しかし山の麓にシェリーはいつも廃墟になった小屋を見た。鎖につながれ

た罪人たちが、聖ピーター街の舗道には雑草を掘り起こす罪人たちがいた。愛すべきテムズ川の堤防にはおこりで震える老婆がいた。そうしてシェリーは自分の書き物を脇に押しやり、夢を忘れ、薬を手に、あるいはスープを持って、貧乏人たちの治療にと歩き出すのだ。時が進むにつれ、必然的にシェリーの周りには恩給生活者、生活保護者たちの奇妙きわまりない集団が寄り集まることになった。寄る辺のない女たち、それから他人の子供の世話も引き受けた。他人の債務を支払い、遠路への旅路の計画を立ててやったり、他人との関係の仲裁をした。もっとも靈感に溢れていた詩人はもっとも現実的な人間でもあった。

ベック教授は言う。こうして詩と人間性の結合からシェリーの詩の本当の価値が飛び出してきたのだ。それは「純粋なる詩人」ではなく、人間の悪をただそうとする情熱に溢れた詩人の詩であった。もし今も生きているのであれば、シェリーは詩というものと「政治、社会そして政府に今すぐ必要な改革」についての文章をうまく融合させて書いたことだろう。早すぎる死のために、シェリーは本当のメッセージを残すまでに至らなかった。その詩の難しさは、詩と政治の間の葛藤がそのなかに未解決のまま荒れ狂っているからである。ベック教授の意見に賛成はできないかもしれない。しかしシェリーを今ひとたび読みさえすればいい。教授が言う難しさというものに出くわすだろう。読み返す前はとても良いと思っていたのに、実際は貧弱だとわかるそうした面食らうような事実とその難しさの一部は存在する。シェリーのことを偉大な詩人として記憶していること、そしてページをめくった途端に、へたな詩人だなどと思う事実をどうすれば説明できるだろうか。その説明はシェリーが「純粋な詩人」ではなかったということにあると思われる。詩という狭い空間のなかにシェリーは意味を凝縮しようとはしなかった。その詩には、キーツの頌歌にあるような豊かで緻密なものはない。その趣向は感傷的になることもある。シェリーの詩は選集ものに見られる欠陥をすべて示している。シェリーは非現実的で、わざとらしく、冗長である。ベック教授が賞賛をもって抜き出した行：「良い夜(お休み)だって。違うよ。今夜は病んでいるよ。」(Good night? No, Love! The night is ill.)という行でさえ、その証拠のように見える。でも絶妙な美を持っているとはいっても、もし叙情詩を離れ、長詩『エピサイキディオン』(訳注: *Epipsychidion* [1821]。「魂の魂」の意味)、あるいは『鎖を解かれたプロメテウス』(訳注: *Prometheus Unbound* [1820])を読むことになれば、長詩だから欠陥があっても目立たないわけだが、シェリーの偉大さをまた実感することになる。そしてここでまた難解さに遭遇するのだ。というのもこれらの詩から教訓を抜き出すよう求められると、はたと困って、訳がわからなくなってしまう。「政治、社

会、そして政府」のどのような改革を、詩が唱えているのかほとんどわからないのだ。シェリーの詩の偉大さは、なにかの哲学のように限定的なものでもなく、完璧な表現のような純粋なものにあるわけでもないように思われる。その偉大さは存在のあり方というものにあるのだ。ひとかたまりとなって飛んでゆく雲、一陣の旋風を抜け出して、純粋な静けさ、強烈で、風のない平穏の空間に、われわれは入り込む。弁護しようという気持ちがあろうと、なかろうと、優秀さに気づく。『ひばり』、『西風に寄せて』は詩(poem)だ。『プロメテウス』や『エピサイキディオン』は韻文(poetry)である(訳注：政治的、社会的主張があるものをpoetryとしたようだ)。

それで、その死から百年以上経った、1927年のこの有利な位置からシェリーと読者との関係を概説すれば、シェリーにとってイングランドは野蛮の地、そこでは著作家たちがジョージ摂政宮に敬意を示さなかったといって投獄される、聖書への攻撃を出版したかどでさらし台にさらされる、反逆罪の嫌疑で織工を処刑する、そしてキリスト教の信心を厳格に調べることもなく、無神論を公言しただけで、オックスフォードから学生を追い出す、そうした野蛮の地であった。政治的に見れば、シェリー時代のイングランドはすでに右肩下がりがりだった。その戦い、たとえ勇敢だとしても、ちょっと時代遅れで、そのため少しばかり滑稽な怪物との戦いであった。でも個人的にいえば、シェリーはわれわれ現代人にずっと近い存在だ。というのも世間相手に戦いを挑んだその報いとともに、また別の戦いが、それ以前のもの同様に意味のある戦いが、代々引き続き起こったからである。もちろん多くのことが公になったわけではないが。夫は妻に戦いを挑み、息子は父親と戦う。貧乏人は裕福なもの、雇用者は使用人と戦う。一方には常にこれらの関係を筋の通った、痛みの少ない、卑屈ではないものにしようという奮闘がある。また一方で、そうしたものをそのままにしておこうという努力がなされる。シェリーは息子としても、夫としても、個人の生活では、道理と自由を求めて戦った。そしてその実験は、いろいろな点で損害の大きなものではあったが、現在われわれが葛藤をするなかで、以前よりも大きな誠実、幸せを手に入れられるようになってくれている。サセックスのティモシー卿家は、たった一シリングを渡して、息子たちを勘当するようなことはもうしない。ブース家もバクスター家も正妻でない女はまったくの悪魔だとする確信を持っているわけではない。個人の生活の慣習のとらえ方はもうそれほど粗野なものでも冷淡なものでもない。これらはシェリーの実験の失敗と成功によるものだ。

こうしていまやわれわれは、われわれ独自の眼鏡をかけてシェリーを見ることになる。シェリー、甲高い声の、魅力的で、痩せた男。迷信と野蛮の力に向かっ

て、雄々しい勇気を胸に、馬に乗って立ち向かった英雄。同時に、ものがよく見えず、向こう見ずで他人の感情には鈍感な男。自分の夢にうっとりし、存在の極みにまで上り詰め、メアリが言うように、「変わり者」、ただの「生き物」。が、単なる生き物より、以前よりは善なる存在、高貴で、離れた遠いところにいる生き物だ。たとえば、突如としてドアにノックの音。おや、ハント夫妻と七人の子供たちはたしかレグホンにはいるはず(とシェリーは思う)。バイロン卿は子供たちに手荒だ。ハント氏の胸にはひどくこたえる。シェリーはきっとすぐに子供たちが楽しくできるよう見に行くことだろう。夢うつつから身を起こして、ようやくシェリーは立ち上がるのだ。

原注：Walter Edwin Peck, *Shelley: His Life and Work* (1927)への書評